



問い合わせ 生涯学習課 ☎38-2115

昨年は会下山遺跡(三條町)にとって、昭和31年の発掘調査開始から60周年、平成23年の国史跡指定から5周年の節目の年、さまざまな記念事業を開催しました。今回は、その一環として昨年の8月20日にルナ・ホールで開催した記念シンポジウムでの討論内容を踏まえて、会下山遺跡の謎に迫りたいと思います。

会下山遺跡は今から約2000年前の弥生時代の遺跡です。会下山遺跡の発見で明らかになった弥生時代の山の上の村は「高地性集落」と呼ばれていますが、日本で稲作文化が始まった弥生時代に、なぜ米作りが不便な山の上で生活をしたのか謎のままです。記念シンポジウム「会下山遺跡と高地性集落の謎―弥生人はなぜ山の上に住んだのか―」では、兵庫県立考古博物館名誉館長の石野博信先生に講演していただきました。

弥生時代の代表的な高地性集落として全国に知られる会下山遺跡が、なぜ学術的に重要なのか。60年を経た今日だからこそ、新しい視点から研究される必要があります。



会下山遺跡

山の開発道具はごいじ

会下山遺跡は標高約200メートルの見晴らしの良い山の上にあります。昭和30年代の発掘調査を中心に、土器・石器・金属器などの多数の出土品と竪穴住居跡や祭場跡、高床倉庫跡などが尾根上に見つかり、発見当時は稲作に不便な山の上に集落があったことが驚かれました。ここでは今でも解明されていない謎のうち、2つの謎を取り上げます。一つは、弥生時代の生業の中心であった稲作に不可欠な穂刈り具である石包丁が見つかっていないことです。このことから、会下山で暮らした人々が稲作を行っていたのは、会下山で暮らした人々が稲作を行って

いなかったと考えることができます。もう一つの謎は、平野で暮らしていた人たちが山の上がってきて集落をつくったには、木々を伐採したり、木材を切り倒すための斧が大変少ないことがあげられます。石製の重い斧や最新の鉄製の板状斧など、山の開発には必要不可欠な伐採の道具が、なぜかほとんど見つかっていないのです。この謎は、今後の研究で解明されるのが期待されます。



発掘された竪穴住居跡(昭和三十年代)

木工の細工に励んでいた村人たち

出土した道具類には、石製と鉄製の工具が目立ちます。これらの工具は、ほとんどが木製品の加工に用いられたもので、ほぞ孔をあけたり、表面の仕上げに使用された道具です。大阪湾に面した芦屋の地は船が活発に使われた地域であったと考えられるので、船の部材を会下山で作っていたのかもしれない。



出土した鉄の道具

立派な石斧や磨製の矢じりは、ステータスシンボルだったのか

会下山遺跡の竪穴住居跡からは、柱状片刃石斧と呼ばれる石の斧が見つかっています。これは鉄器が登場してからも使用され続けた石器で、長さは20センチメートルあります。この斧は徳島県吉野川流域産の石材で作られており、遠くの地域からはるばる持ち込まれたことがわかります。ヨーロッパや中国では、斧は強靱な力と活躍ぶりから神聖視されていた事例がありますので、会下山遺跡の柱状片刃石斧も代々大切に伝えられていた宝器であったと考えられます。

もう一つすばらしい出土品として、磨製石鏃(矢じり)があります。これは硯石として有名な近江高島石製で、薄くシャープに作られています。黒光りの神秘性も備わっており、これも実用的な武器であったとは考え難いものです。これは会下山遺跡で最大の竪穴住居跡から出土しており、やはり宝器として扱われていたと考えられています。これらは、青銅製漢式三翼鏃とともに、

所有する人物や集団のステータスの証であったのでしょうか。

中国大陸製の珍しい銅の矢じり

市指定文化財である青銅製漢式三翼鏃(矢じり)も稀少な品です。これは紀元前の中国大陸で作られたものですが、前漢の出先機関として朝鮮半島にあった楽浪郡や北部九州を経由して、会下山遺跡に持ち込まれたと考えられています。



青銅製漢式三翼鏃

瀬戸内海航路を監視していた高地性集落

今回のシンポジウムでは、最も典型的な高地性集落として国史跡に指定された会下山遺跡について、その性格がまだまだ分かっていないことが多くあることが改めて認識されました。

一方、会下山遺跡と同様に昭和30年代に調査された高地性集落跡である香川県の紫雲山遺跡では、今、国史跡の指定を目指して再調査が進められています。この遺跡では、会下山遺跡では発見されていない物見やぐらのような建物跡が発掘されており、瀬戸内海の航路を監視していたことが有力視されています。瀬戸内海に面した急峻な山のいたゞきや島嶼部の高地性集落には、貝塚や漁労具をはじめ、海人の生活や活動を想定させるものが見つかっています。高地性集落と言え、山の民を連想してしまいがちですが、海人との関連についても検討が必要でしょう。

先進的な品物の入手と市場

これらのことは、弥生時代に海の村や山の村といった区別がなかったことを意味するのでしょうか。稲作文化は海岸沿いに伝わっ

ていったことから、米づくりを伝えたのは海運・操船に長けた人たちであったと考えられます。さらに、中国大陸や朝鮮半島から北部九州を経て、瀬戸内海・大阪湾を通過する船に積まれた鏡や鉄素材などが高地性集落に持ち込まれていることから、弥生時代の人々は山と海との間を日常的に行き来していたのかもしれない。

最新の考古学研究に貢献している会下山遺跡

以上のように、会下山遺跡は発掘調査から60年を経た今でも、弥生時代や国家形成に関する最新の研究にとって重要な国指定史跡です。

国指定史跡は、日本の歴史を知る上で欠かせない国民の歴史的財産であるとともに、芦屋市の財産としても積極的に守り、活用していきたいと思えます。



会下山遺跡からの眺望